

診療放射線技師の教育者として最近思うこと — 何が正しいのか？

島本 佳寿広

1. 「腔」は「くう」なのか？

もう30年以上も昔の話になる。『「こうくう」外科なんてものはない。「こうこう」外科である。「きょうこう（胸腔）」、「ふくこう（腹腔）」はあるが、「きょうくう」、「ふくくう」は存在しない。』私が医学部で受けた口腔外科学の授業で、教授が開口一番に述べた言葉である。ご自身の診療科の名称をまともに呼ばれないことに相当ご立腹の様子であった。「医学の専門用語には難しい漢字が多い」と言い訳をしたくもなるが、教授の見解によれば、特に「腔」に限った話ではなく、「医者は漢字をまともに読めなくせに、そのことを全く自覚していない」そうだ。そうまで言い切るのはどうかと思うが、思い当たる節が皆無ではない。

漢和辞典に「腔」の読み方は「こう」とだけしか書かれていない。だが、「腔」を「こう」と読ませるのは難儀なようで、講演会や研究発表で演者の誰もが「くう」と発音しているように聞こえる。厚生労働省の通知でもご丁寧に「くう」と書かれた文書を見たことがあるし、案内板に「口くう外科」と書いてある病院もある。ワープロもかつては「くう」を「腔」と変換するには自分で単語登録する必要があったが、ATOKの医学辞書には予め登録されている。いちいち気にしなくて済むのはありがたいが、これでよいのか？ という気もする。

さて、「腔」を「くう」と読んだところで日常診療に支障が出て困るわけではないし、学生たちにも「正しい読み方」を説明しておく程度で済ませているが、学術・研究としてみた場合はどうなのだろう。専門用語ならば定義は明確で、共通の理解のもとで用いるのが大前提な気がするが、実際には少々いい加減であっても問題なく通用してしまう。漢字の読み方はまだしも、放射線医学では、古くからある「画像所見に関わる用語」は解剖学用語との不一致があるので、解剖学用語が頭に染み込んでいる人間には居心地が悪い。日本医学放射線学会は1986年に用語の標準化を目指して「放射線診療用語集¹」を編纂した。その後、改訂を重ねたものの、診療科の特殊性からカバーする領域が広すぎることもあって、解剖学用語までは十分手が回らないようだ。

2. 胃に前庭部はない？

診療放射線技師教育における画像診断学で、最初に違和感を覚えるのは胃透視（UGI）の解説である。日本解剖学会の公開している「解剖学用語²」をみると、胃には「穹窿部」も「胃角」も「前庭部」も収載されていない。「穹窿部」は解剖学用語で「胃底」または「胃円蓋」というべきもので、「胃角」は小弯にある「角切痕」が相当するようだ。解剖学用語では「胃体」の次にあるのは「幽門部」である。「幽門部」は「幽門洞」と「幽門管」に分けられる。「幽門洞」と「幽門管」は「中間溝」によって分けられ、「幽門洞」の壁が薄いのに対し、「幽門管」は壁の厚い筋性管である。両者は何気に境界を引くものではなく、そもそも構造が違うのだ。UGIで「幽門前庭」という場合は、「幽門洞」+「幽門管」を指しているらしいが、「前庭」=「幽門洞」とするほど明確に区別しているように思えない。こうして学生には、1年生の解剖学で覚えたことと異なる「所見用語」を説明することになる。「専門用語は統一されていない」とか、「基礎と臨床は違う」としてお茶を濁すのも釈然としないが、これらは長い歴史のある用語であり、教える側としては「X線画像で見えるものと解剖学用語は別物」と割り切るしかなさそう。とはいうものの、学生たちは1年で学習したことの大半を忘却しているようで、解剖学と異なる説明をしても質問されたことがない。

UGIに限らず、一般臨床で頻出する用語でさえ統一されていないのも気になる。例えば診療報酬の通知文書には「冠動脈CT撮影加算」とあるが、世の中には「冠動脈」と「冠状動脈」の二つが混在している。解剖学用語は「冠状動脈」であり、「冠動脈」はない。これが「放射線診療用語集¹」になると、ご丁寧に coronary angiography=冠状動脈造影、coronary arteriography=冠動脈造影が収載されている。「冠状動脈」と「冠動脈」と2つの訳語を別物のように収載することにどのような理念・意義があるのか私には理解できない。この領域の専門家には何か物凄い拘りがあるのだろうか。学生たちは「なぜ二つの異なる表現があるのか」とか、「正しいのはどちらか」とは問わない。「どちらも使われている」という説明だけで納得しているようだ。

3. Paraaortaはどこにある？

“coronary”に限らず、簡単な用語でも調べてみると、資料によって表現の違いが多すぎて憂鬱になる。特に日常臨床で既に異なった用語が定着している分野では、解剖学用語を基準にすると違和感が半端ではない。名古屋大学全体の国際化の流れで学部教育でも英文の資料を使う機会が増えているが、授業は日

本語なので、どの訳語を選択するか悩ましい。

例えば paraaorta には、だいたい 4 種類（大動脈旁、大動脈傍、旁大動脈、傍大動脈）の訳語が登場する。“para” については人体のさまざまな部位に出るので、「傍」か「旁」か、先付か、後付かで、常に 4 パターンに遭遇する。解剖学用語だと「傍」ではなく「旁」を後付けで表記するのが一般的のようなので、「大動脈旁」を「正しい用語」と定めたいところだが、放射線医学関係では「傍大動脈」と記しているものが圧倒的に多い。

paraaorta の場合は、更に根本的な問題として、そもそも解剖学用語にこの用語は収載されていない。「大動脈リンパ節」の名称が付してあるのは、左腰リンパ節（外側大動脈リンパ節、大動脈前リンパ節、大動脈後リンパ節）および中間腰リンパ節（大動脈大静脈間リンパ節）である。臨床上は paraaorta を腰リンパ節または大動脈リンパ節群の総称として大きな間違いはないと思うし、学生にも細かなことは教えていない。しかし、CT では解剖学用語にあるリンパ節は位置の同定が可能であり、所見に正確さを求めるのであれば個々の区分にしたがって記載すべきだろう。

4. Couinaud 分類とは？

Couinaud 分類は肝臓の亜区域分類として一般に流布し、肝臓癌取り扱い規約³にも記載されている。超メジャーな分類であり、およそ画像診断に携わっている者が知らないことはないはずだ。画像解剖の演習では学生にも徹底して教えている。しかし、海外のテキストを読むと、非常に困ったことに「我が国で流布している Couinaud 分類は果たして本当に Couinaud 分類なのか？」という疑惑がわいてくる。

まず、Applied Radiological Anatomy⁴を読んでみる。この画像解剖学のテキストには、「Couinaud 分類にしたがい、肝臓を 9 区域に分ける」と記載されている。ここで 8 区画ではなく 9 区画になるのは SIV を SIVa と SIVb に上下 2 分割するためであるが、この分類法は Radiology Review Manual⁵にも記載されている。この本における肝右葉の分割方法は「我が国の Couinaud 分類」に一致しているが、肝左葉の S II～SIV の亜区域分類では、左肝静脈は（S II + S III）と SIV の境界にあり、S II と S III の間にはない。

他の解剖学書を調べたところ、世界で最もよく使われている解剖学の教科書とされる KL Moore の“Clinically Oriented Anatomy⁶”にも同様の記述があった。Moore の本では SIV を上下に二分割していないが、外観の模試図は Applied Radiological Anatomy と全く同じで左肝静脈は（S II + S III）と SIV の境

界を走行している。

果たして Couinaud 自身はどう記載していたのだろうか？ 二村雄次先生（名古屋大学名誉教授）が翻訳出版された本⁷によると、「左門脈裂は S2と S3 の間に位置し、解剖学的肝左葉の中で前下方に傾きながら横走している」、「左肝静脈の主幹は左門脈裂の面にある」との記述がある。そうすると左肝静脈が S2と S3の間に分け入るのがオリジナルの分類法らしく思えるのだが、前面からみた模式図は S2と S3は水平方向に分割されており、肝臓癌取扱い規約³に収載された図のように斜走していない。水平方向に分割する図は Applied Radiological Anatomy⁴と Moore の解剖学書⁶と同じものに見える。国内で授業をするには無視した方が混乱しない相違点と思うが、海外では日本と違う亜区域分類が主流なのか気になるところだ。

5. おわりに

厚生労働省が診療放射線技師による読影補助を認め、診療放射線技師教育の中で画像診断学を強化する要請が強くなっていることは、健康文化財団紀要第 50号⁸、第51号⁹で述べたとおりである。卒前教育に大きな期待を寄せられるのは理解できるが、対応できることにも限度がある。簡単な用語や定義、分類等に釈然としないものが含まれていても、細かく検証する時間もない。自分が十分納得していないことを含めて、学生に一通り教える必要のある事項が増えそうで、なんとも憂鬱だ。とはいうものの、学生たちは与えられたものを消化するのに手一杯である。こちらの心情を理解していないのは幸いというべきか。

文献

1. 日本医学放射線学会編：放射線診療用語集 第3版（金原出版2002）、第4版（電子版）
2. 日本解剖学会：解剖学用語 改訂13版（公開用日本語）
3. 日本肝臓研究会編：原発性肝がん取扱い規約 第6版 金原出版2015
4. P. Butler, A. W. M. Michell, J. C. Healy, ed. : Applied Radiological Anatomy 2nd edition. Cambridge University Press, 2011, p. 150-162
5. Wolfgang Dähnert : Radiology Review Manual 7th edition. Lippincott, Williams & Wilkins 2011, p. 696
6. K. L. Moore, A. F. Dalley, A. M. R. Agur : Clinically Oriented Anatomy 臨床のための解剖学（日本版・第2版）メディカル・サイエンス・インターナ

シヨナル2016、p. 260-264

7. Couinaud：肝臓の外科解剖（二村雄次訳）医学書院 1996
8. 島本佳寿広：診療放射線技師教育のいま 健康文化振興財団紀要 第50号
p. 144-153
9. 島本佳寿広：診療放射線技師教育のこれから 健康文化振興財団紀要 第
51号 p. 143-148

（名古屋大学大学院医学系研究科医用量子科学講座教授）

